

# 世界の夕名哭哭がムロ亦湾に

奇美集団のコレクション

ストラディヴァリウスをはじめとする、

ヴァイオリンの名器の一大コレクションが

台湾の台南にあることはあまり知られていない。

世界的なIT企業「奇美集団」を率いる

許文龍氏のコレクションがそれだ。

自らもヴァイオリンを手にする台湾経済界の大家は、

人類の遺産の保護者でもある。

## 奇美集団

1953年、許文龍氏によって設立された奇美実業(プラスチック工場)からスタートし、現在ではABS樹脂の分野で世界のトップメーカーの座を占めている。経営と所有の分離、従業員持ち株制、週休2日制の導入など、台湾の企業経営を常にリードする手法を導入。99年には日本の富士通と提携、パソコンの基幹部品であるTFT型LCD(液晶表示装置)の事業に参入している。その一方、文化事業にも力を入れ、本社のある台湾・台南には博物館を創り、無料で公開している。許氏は28年、台湾・台南の生まれ。96年から総統府の国策顧問を務める。99年、第4回日経アジア賞受賞。



アマティ  
1656年製  
ヴァイオリン



奇美集団が保有するコレクションをまとめた  
「The Chi-Mei Collection of Fine Violins」

文 中嶋嶺雄  
text by Mimeo Nakajima  
◎国際社会学者、前・東京外国語大学学長

なかしま・みねお

1936年、松本市生まれ。60年、東京外国語大学中国科卒業後、東京大学大学院国際関係論課程修了。66年から東京外国語大学の教壇に立つ。専攻は国際関係論・現代中国学・アジア地域研究で、世界有数の中国通として知られる。評論集「北京烈烈」(81年度サントリ学芸賞受賞)はじめ、「現代中国論」「中国の悲劇」など著書多数。現在はアジア太平洋大学交流機構(UMAP)の国際事務総長才能教育研究会常務理事。東京外国語大学学長を経て、2004年からは秋田に創設される国際教養大学の学長に就任することが決まっている。夫人はだしのヴァイオリンは、松本音楽院で鈴木鎮一門下生として学んだ本格派。



ストラディヴァリウスのようなヴァイオリンの名器が三百年前後経った今日でも至高の音色を奏でること自体、その形も外観も往時のままであることとともに、まさに現代の不思議だといつてよいであろう。それは今日のハイテク時代、IT全盛の時代への一つのレジスタンスだと言えるかもしれない。台湾の代表的企業の一つである「奇

美集団」は、まさにハイテク時代、IT全盛時代を先取りしてきた先端企業集団であり、最近も日本のトップ企業が連携を求めたことで話題になったばかりである。その奇美集団を率いる許文龍会長は、李登輝・前総統とも親しい非国民党派の有力人士であり、大変な親日家で、台湾の近代化に尽くした後藤新平を崇敬していることでも知



ガラルネリ・デル・シュエス  
1733年製  
ヴァイオリン



ストラディヴァリウス  
「ヨアヒム・エルマン」  
1722年製  
ヴァイオリン



ストラディヴァリウス  
「ポッケリーニ」  
1709年製  
チェロ



ストラディヴァリウス  
「ラシュキン」  
1707年製  
ヴァイオリン

氏のもう一つのキャラクターは、ストラディヴァリウスやアマテイ、ガラルネリなど、イタリア・クレモナ産をはじめとする世界のヴァイオリンの名器を合計二十挺近くも蒐集していること。ストラディヴァリウスは「ヨアヒム・エルマン」や「ポッケリーニ」といった最高級の名器を所蔵しており、そして、自らもヴァイオリンを弾いて来客をもてなすことである。

私自身そのようなもてなしを受けたばかりか、奇美集団の奇美文化基金が所蔵しているストラディヴァリウスを二度も弾かせてもらったことがある。

最初は一九九二年一月三日、ごく親しい友人やご家族により李登輝總統の誕生日祝いの会が催された時であった。当日、お宅へ参上すると、李登輝ご夫妻は、小生のために、許文龍氏からストラディヴァリウスを借り出されており、私は台湾第一級の新古典弦楽四重奏団のメンバーと一緒に、「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」を弾かせて頂いたのである。演奏に合わせて李登輝さんが手拍子で膝をたたいていた姿が忘れられない。

二回目は九九年十二月、第十一回「アジア・オープン・フォーラム」台南会議が開かれた折のことであった。台南は奇美集団の本拠地であり、許文龍さ

んの出身地でもある。許文龍さんは、台南を訪れる日本の友人、知人を自宅に招いて、夜遅くまで自らヴァイオリンを弾き、お抱えの歌手と一緒に「ふるさと」や「浜辺の歌」など懐かしい日本の歌で歓待されることで知られている。

その夜も会議が終り、晚宴が済んだあとだったので、もう夜十時半頃だったと思うが、日本側の主なメンバーをぜひ自宅に招きたいとのことであった。こうして許文龍さんの歓迎を受けたのだしたが、私にも何か弾くようにとのことだったので、ストラディヴァリウス（たしか「ラシュキン」）をお借りして、バッハのブレイを弾かせて頂いた。

しかし、事前に一度も手を触れてないヴァイオリンと弓では、いかにストラディヴァリウスだといつても、うまく弾けないものである。内心の後悔が残っていたのだが、「ご自身もヴァイオリンを習われていて、その場に居合わせた川勝平太氏（国際日本研究センター教授）が後日、その時のことをよく褒めて下さるので、いつも大いに恐縮している。



1996年4月、李登輝總統（当時）宅を訪れた際の記念写真。李登輝總統（左から5番目）を囲んで許文龍氏（同6番目）と中嶋氏（同4番目）、李登輝夫人・曾文惠女士（同3番目）、中嶋夫人（同2番目）